

R. A. SAYCE 「1530年-1800年に印刷された本の植字慣行と印刷地の特定」  
の検討 (4)

Verification of R. A. Sayce's "Compositorial Practices and the Localization  
of Printed Books, 1530-1800" (4)

福島 知己

FUKUSHIMA Tomomi

一 R. A. SAYCE 「1530年-1800年に印刷された本の植字慣行と印刷  
地の特定」 (4)

前号に引き続き R. A. Sayce, "Compositorial Practices and the Localization of Printed Books, 1530-1800," *The Library*, fifth series, 21(1), March 1966 の翻訳を以下に掲げる。今号では第3章から末尾までを扱う。

(ここから翻訳)

III. ページづけ

1. ページづけと丁づけ

16世紀末頃にページづけが丁づけにとって代わるという McKerrow の要点につけ加えることはほとんどない(ただし、当然のことながら、それ以前にもページづけの例は数多く見つえられる)<sup>1</sup>。とは言うものの、後年の著しい丁づけの例を列挙するのは有益かもしれない。Geneva (1588年)(少なくともこの点では、Genevaの擬古趣味的傾向は明示的ではない)、Venice (1601年)、Frankfurt (1607年)、Rouen (1619年)、Barcelona (1617年)、London (1620年)、Sedan (1633年)、Paris (1638年)、Seville (1648年)、Verona (1649年)、Madrid (1667年)、Amsterdam (1669年)、The Hague (1743年)。AmsterdamとThe Hagueの例はいずれも聖書であり(列挙したもっと早い時期の本にも聖書がいくつかある)、この予期せぬ復活はおそらく、聖書を印刷する際に伝統的に擬古的なやり方がとられたということと、非常に大型の本にページづけを行うのが煩わしいということから説明される。

2. ページ番号を丸括弧または角括弧で囲むやり方

このやり方は最初のページだけでされる場合もあるし、全部のページでされる場合もある。丸括弧をつかうやり方(I)は多くの国で時折使われているが、一番よく使われるのはイングランドで印刷された本である(Oxford 1585年-1668年、London 1622年-1799年、Dublin 1709年)。他の地域では、オランダ(Amsterdam 1695年-Leiden 1784年)、スペイン(Salamanca 1737年-Madrid 1787年) およびFlorence (1696年)、Geneva (1758年)、Stockholm (1786

---

<sup>1</sup> *Introduction*, p. 85

年) で印刷された本で見つかっている。しかし、フランスで印刷された本では、少なくとも1790年以前には少ない。Parisの例は、1759年、1791年、1794年-5年、1797年で見られる。

他方、角括弧をつかうやり方[]は、イングランドで印刷された本の独特のやり方であり、18世紀前期に印刷された本でとりわけ頻度が高い。Londonで印刷された本の例は1670年から1750年の刊本に見つかり、Oxfordで印刷された本の例は1例(1724年)見つかっている。他の国で印刷された本の例は見つかっていない。

二重に丸括弧をつかうやり方(I)が、18世紀にイタリアで印刷された本に5例見つかっている。Bologna(1702年、1787年)およびVicenza(1776年、1786年、1791年)である。

3. ページ番号をオーナメントで囲むやり方 (I) 等

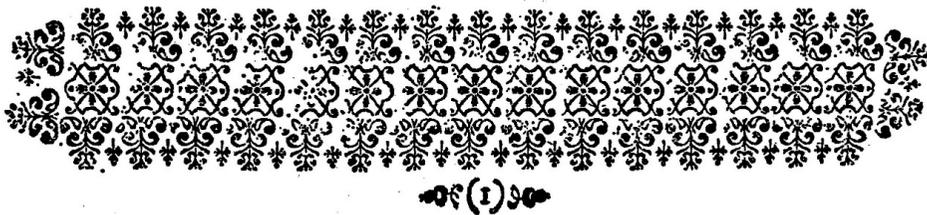


FIG. 4a. J. Jonsius, *De scriptoribus historiae philosophicae*, Francofurti, ex officina Thom. Matth. Götzii, 1659.



FIG. 4b. I. Spenserus, *De legibus Hebraeorum*, Lipsiae, apud Ioh. Frid. Zeitlerum, 1705.



FIG. 4c. J. W. Jägerus, *Examen theologiae navæ*, Tubingæ, typis Johannis Adami Reisii & Viduæ G.H.R., 1707.

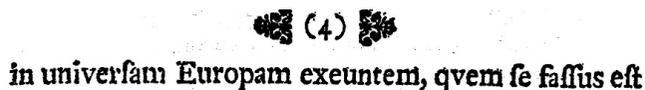


FIG. 4d. J. M. Schramm, *De vita et scriptis famosi athei Julii Cæsaris Vanini*, Custrini, typis & sumptibus Godofredi Heinichii, 1709.



FIG. 4e *Museum historico-philologico-theologicum* (T. Hasaeusと N. Nonnenによる), Bremae, sumptibus Hermannii Jaegeri, typis Hermannii Braueri, 1728.

この特徴的流儀もまた、最初のページだけでされる場合もあるし、全部のページでされる場合もあるが、ドイツの本だけにほぼ限られる。当然ながら、使用されるオーナメントにはいくつかのバリエーションがある<sup>2</sup>。最も古い例はFrankfurtで印刷された本（1659年）で見られ、最も遅い例はStrasbourgで印刷された本（1775年）に見られる（これもまたドイツの慣行の変化が緩慢であることの例証と言える）。印刷地と印刷年の完全なリストは以下のとおり。Frankfurt（1659年-1713年）、Frankfurt-on-Oder（1660年）、Augsburg（1667年、1723年）、Strasbourg（1676年-1775年）、Dresden（1679年）、Hamburg（1687年、1751年）、Leipzig（1691年-1757年）、Tübingen（1694年-1719年）、Halle（1709年）、Küstrin（1709年）、Christian-Erkabger（1710年）、Marburg（1717年）、Breslau（1727年）、Bremen（1728年）、Danzig（1729年）、Cologne（1731年）、Berlin（1745年-55年）。ドイツ以外でわずかに見つかるもののうち、Basle（1679年）とStockholm（1713年-77年）は、驚くに当たらない。The Hague（1682年）とRotterdam（1718年）<sup>3</sup>は意外である。少なくともThe Hagueの例はほんとうの印刷地か疑わしいとみなさなくてはいけない。

#### 4. Pag: I

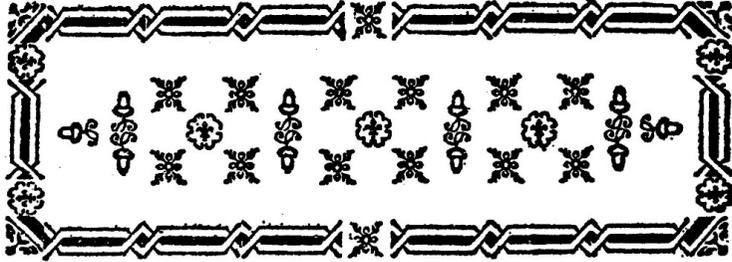
ページづけがされている最初のページでしばしば頭にPag: I（Pag. IとかFol: IとかFueil: IとかBladz: 1等々も含む）などと記されているのが、オランダで印刷された本の特徴である。これはおそらく、もっと早い時期の慣行として、丁づけされた本のすべての紙葉のページ番号の頭に同様の仕方で記していたことの名残りである。調査対象中では、たとえばAmsterdamで1582年に印刷された本やAntwerpで1592年に印刷された本でそのようなやり方がされている。またCologneで印刷された本（1535年）やParisで印刷された本（1542年-55年）の例も見つかっている。奇妙なことに、最初のページだけをこのやり方で記す最も古い例は、Speyerで1581年に印刷された本であり、ついでLondonで1583年に印刷された本が見つかっている。Londonではさらにもう1例が見つかる（1591年）。最も古いオランダの例は1610年に印刷された本（Amsterdam）<sup>4</sup>であり、最も遅い例は1776年に印刷された本（Leiden）<sup>5</sup>であ

<sup>2</sup> たとえばFig. 4を参照。

<sup>3</sup> P. M. Cancparius, *De atramentis*, Roterodami, C. Fritsch, 1718 (W.: HH.8.7). The Hague については前掲、本年報第36号29頁註11を参照。

<sup>4</sup> [O. van. Noort], *Description du pénible voyage fait entour de l'univers ... Par S<sup>r</sup>. Olivier du Nort d'Utrecht*, Amsterdam, la Vefve de C. Nicolas, 1610 (A.: 1804.B.1).

<sup>5</sup> J. A. Ernestus, *Opuscula philologica*, Lugduni Batavorum, S. et J. Luchtmans, 1776 (W.: CC.1.18). Fig. 5を参照。



DE  
NEGOTIATORIBUS  
ROMANIS

AD  
GOTTFRIDUM LEONARDUM  
BAUDISIUM  
LIPSIENSEM,

*ipso die, quo Academicos Juris scientiae  
honores capiebat.*



In Pandectis, doctissime Baudisi, quod tu optime scis, magna est locorum copia, quae intelligi non possunt, nisi lux iis ex auctoribus Latinis affundatur; ut, nisi quis veteris eruditionis copia tamquam inundatum afferat animum, saepe haereat necessario, neque se facile extricare possit. In eo itaque antiquita-

A 2

tis

る。この慣行がどれほど広く採用されていたかを示すために、用いられた本の場所と刊行年を示しておく。Amsterdam (1610年-1763年), Leiden (1633年-1776年), Rotterdam (1647年-1743年), Utrecht (1648年-1741年), Franeker (1650年-1731年), Breda (1653年), Gouda (1655年), The Hague (1660年-1736年), Dordrecht (1698年-1755年), Delft (1722年), Harlingen (1742年, 1770年), Leeuwarden (1747年), Groningen (1754年), Zwolle (1763年)。Antwerpで印刷された本1点(1694年)もオランダの例に含められる。意外なことに、他には見つからなかった。

ネーデルラント以外でこの特徴的な流儀の頻度が高かったのは、興味深いことに、スペインとポルトガルである。以下で見つかった。Cuenca (1596年), Pamplona (1614年), Barcelona (1617年, 1738年), Lisbon (1618年-1720年), Coimbra (1619年), Madrid (1619年-1778年), Valencia (1628年), Huesca (1646年), Seville (1632年-1779年)。それ以外では、Stockholmで印刷された本1例(1656年)があり(Janssonによる印刷), Hamburgで印刷された本の1例(1670年)と、Wittenbergで印刷された本の1例(1701年)がある。

概して、地下出版や海賊版の本がスペインで印刷されたとはあまり考えにくいから、これはオランダ発祥であるという最も信頼できる徴候のひとつと考えられる。

#### IV. プレス・フィギュア

Barber氏によれば、プレス・フィギュアが用いられていればほぼ確実にイングランドで印刷された本である証拠であるという<sup>6</sup>。補足として、また彼の論拠の補強として、調査対象のうち大陸で印刷された本のうちひとつとしてプレス・フィギュアが記されたものは見つからなかったことをつけ加えておく。

#### V. 出版表示における出版年の書き方

可能性としては、ローマ数字をMDなどと書くやり方、ローマ数字だがCIDDなどと書くやり方、アラビア数字をつかうやり方がある。最初の2例にはいろいろなバリエーションがある。以下で小見出しに掲げた刊行年ももちろん、当該の特徴的流儀の実例を示すために、適当に選んだものである。

##### 1. ローマ数字をMDなどと記すやり方

###### (i) M.DC.LII

出版年のローマ数字を2つのピリオドで区切るというやり方は、あらゆる国で使われており、したがってどの国のものかという判断にはあまり役立たない。ただし、このやり方は特にParisで印刷された本の特徴であり、実際Parisで印刷された本の標準的なパターンの一部をなしている。このやり方が使われている例は、1512年から1793年まで見られる。それ以降は、通常はAn Iなどという一連の記し方〔革命暦による表示——訳註〕で刊行年を記すというやり方にとって代わられる。ほかのやり方も時折用いられているから、ピリオドがないからとい

---

<sup>6</sup> 'Catchwords', *passim*. イングランドの慣行についての詳しい議論は、以下を参照。P. Gaskell, 'Eighteenth-century press numbers: their use and Usefulness', *The Library*, V, iv (1949-50), 249-61; William B. Todd, 'Observations on the incidence and interpretation of press figures', *Studies in bibliography*, iii (1950-1), 171-205; K. Povey, 'A century of press-figures', *The Library*, V, xiv (1959), 251-73.

って、それだけで決め手になるということはないが、ほかに特徴的な流儀が使われてはいないかということと組み合わせて考えれば、なにがしかの重要性はある。このやり方はフランスの地方諸都市でもよく用いられており、この場合はLyons (1545年-1780年)もあてはまる。Basle (1521年-1679年)でも広まっており、Geneva (1540年-1780年)でも通常の慣行である。Antwerpで印刷された本では、とりわけPlantin-Moretusの本でよく用いられている。この印刷工房から出された24点の本のうち、17点がこの特徴的流儀を示していた。オランダ、イングランド、イタリアで印刷された本では一般的でないと言えないが、他のやり方が優勢である。ドイツで1700年以降に印刷された本で使用された例は少ない。

このやり方にはバリエーションがいくつかあるが、最もよく見られるのは、2つ目のピリオドを省略して、M.DCLIIなどと記すやり方である。このやり方もかなり広まっており、おなじ考察があてはまる。つぎに、M.D.CLIIというように、2つ目のピリオドの位置が異なるものがある。このやり方はおそらく不注意のせいだが、いくつかの事例では地方都市発祥のやり方であることを示しているかもしれない。ピリオドがM.D.C.LIIというように3回使われている例もいくつか見受けられ、オランダで印刷された本で他の地域より若干多かった。すべての文字の後にピリオドを打つやり方もあるようである。たとえば、Amsterdamで1710年に出版された本なら、M.D.C.C.Xとなる。

#### (ii) M,DC,LII

ピリオドではなくコンマを使うやり方は、Antwerpで印刷された本1点(1537年)とLeidenで印刷された本1点(1714年)で見られた。さらに有意なのは、18世紀にLondonで印刷された本(1727年-99年)でこのやり方が用いられる頻度がかなり高いということである。

#### (iii) M DC LII

空白を設けるやり方もあらゆる国で印刷された本で見つかった。しかし、イタリアで印刷された本では一般的ではなく、フランスで印刷された本ではたいへん少ない。フランスの地方都市の例は発見されず、Parisで印刷された本では4点にとどまる(1695年, 1717年, 1756年)。

#### (iv) MDCLII

刊行年がローマ数字で書かれているものの、ピリオドも空白も使われていないというやり方も、地域を問わず見つかった。ただし、Parisで印刷された本では一般的でなく、フランスの地方都市の例は1点が見つかったのみである(Lyons 1734年)。他方、オランダやイタリアで印刷された本ではかなり一般的である。ドイツで印刷された本でも一般的であり、とりわけ18世紀後期の本では、スモールキャピタルを間隔を詰めて一列に並べるといったやり方がしばしば取られている。この特徴的流儀はドイツの特徴であり、目につきやすい。

#### (v) MDCLII等

通常の大文字Mの後にスモールキャピタル(ないしサイズの小さい大文字)を置くというやり方は、ピリオドつきのものがMainz(1605年)、Rotterdam(1685年)、Geneva(1683年)の本で、ピリオドなしのものがイタリアで1784年に印刷された本に2例(Ravenna, Cesena)見つかった。ただし、これは、とりわけ18世紀中葉にイングランドで印刷された本の特徴といえる。Londonで印刷された本では、ピリオドや空白の有無を問わないとして、1721年から

1774年に印刷された本で見つっている。Cambridge (1739年)とDublin (1753年)でも使用例がある。概して、この特徴的流儀が18世紀の本で使われていれば、イングランドで印刷されたものだと強く示唆される。

#### (vi) イタリック体

当然ながら、刊行年をイタリック体にするのは主に、ローマ数字のMDというやり方をするときに限られる。ただし、アラビア数字でも9例(イングランドで印刷された本に5例とオランダで印刷された本に4例)、**CIDID**も2例(Paris, Halle)見つかった。便宜上これらを一括してあつかう。16世紀と17世紀では、イタリック体を用いるのは3つの地域で印刷された本の特徴である。Frankfurt (1543年-1681年)、Lyons (1554年-1698年)、およびとりわけGenevaである。Genevaで印刷された本では、17世紀にはイタリック体が支配的なやり方であるとみなしてよく、その傾向は18世紀まで続いている(1551年-1780年)。しかし、他の地域でも、めったに見られないとはいえ、使われてはいる。Paris (1587年-1663年)、Poitiers, Nancy, Tournon, and Saumur, Basle (1555年-1625年)、Zurich、ドイツのいくつかの都市(たとえばCologne, Leipzig, Hanau, Heidelberg, Jena, Bremen, Strasbourg)であり、ごくわずかだがイタリアで印刷された本(Venice, Trento, Perugia)にも見られる。アラビア数字のイタリック体5件(London 1573年-99年)を除けば、イングランドで印刷された例は1例(London 1670年)にすぎない。スペインで印刷された例も2例のみである(Madrid 1609年, 1667年)。オランダで印刷された本でも、アラビア数字のイタリック体4件(Leiden 1636年, Amsterdam 1645年, 1662年, 1667年)を除けば、見つからなかった。

他方で、18世紀に印刷された本では、イタリック体にされた例のほとんどはオランダで印刷された本であるが、AmsterdamやLeidenで印刷された本は見つからなかった。The Hagueで印刷された本(1724年-63年)では特有のやり方であり、Rotterdam (1712年-28年)およびUtrecht (1759年)でも同様である。他でイタリック体が用いられるのは、すでに述べたように、Genevaで印刷された本であり、Lausanne (1747年)とNeuchâtel (1782年)で使われている例があるのもこれと関連しているかもしれない。ドイツで印刷された本では2回(Halle 1709年, Berlin 1751年)見られ、イタリアで印刷された本で3回(Rome 1754年, 1757年, Naples 1780年)見られる。妙なことに、確実に18世紀にParisで印刷された例は見つからなかった。

イタリック体が用いられている実例は明らかに間歇的すぎるので、本格的な結論を導くことはできない。1700年以前なら、オランダで印刷された本でイタリック体のローマ数字で刊行年が記されるということはあるにそうにない。他の証拠と組み合わせて言えば、Frankfurt, Lyons, ないしとりわけGenevaで印刷された本であると示唆される。他方、1700年以降なら、オランダで印刷された本と言えそうである。

## 2. **CIDID**などと記すやり方

MDをつかうやり方のときとおなじく、**CIDID**が使われるときも、ピリオドや空白とともに用いられたり、そうでなかったりする。**CIDID**のときには区別してもそれほど有意ではなさそうであるが、ただしParisで印刷された本で**CIDID**が出てくる数少ないケースの場合は、ピリオドをつけて用いられることのほうが多い。したがって、**CIDID**と**clbb**という2つの主要なやり方だけに絞って注目すればよい。前者は主にイタリアないしドイツで印刷された本である

(ただしそれ以外の場合もある)。後者はオランダで印刷された本(ただしそれ以外の場合もある)であって、はるかに数が多い。いずれにせよ最も古い例はAntwerp(1574年)であり、最も遅い例はLeiden and Amsterdam(1799年)である。このほか、∞というやり方もある(ただし、はるかに数少ない)。

(i) **CIDICLII**

このやり方が見られる一番早い時期の例は、Basleで印刷された本(1578年、1584年、1684年)であり、Genevaで印刷された本でも1例(1613年)が見られる。しかし、最も頻度が高かったのはイタリアで印刷された本であり、MDCLIIというやり方が支配的であったとみなしてよい(Florence 1582年-Rome 1775年)。ドイツでも広く用いられる(Harborn 1586年-Gera 1798年)が、**cbb**というやり方ほどは用いられない。オランダではごくたまに見られる(Franeker 1586年-Leiden and Amsterdam 1799年)。フランスで印刷された本ではほとんど見られない(Paris 1583年、1601年、1680年、Orleans 1620年)。

(ii) **cbbcLII**

調査対象中でこのやり方が最初に現れるのは、AntwerpのPlantin工房で1574年に印刷された本である。もっと事例が他の地域で印刷された本に見つかれば、興味深いと言える。以降1628年まで、このやり方は、Plantin本やその他のAntwerpで印刷された本で、現れる。しかし、このやり方は、すでに見たように、オランダに固有の特徴であるから、他のオランダの特徴的流儀についてと同様に、Plantin工房の影響が決定的だったと考えてみたくなる。この仮説の補強となるのが、オランダで印刷された本でこのやり方がもちいられる分布は一様でなく、どの地域にもましてLeidenで印刷された本でたいへん頻度が高いということである。Leidenでは1586年から1768年まで38例が見つかっているが、この年代がそのままオランダで印刷された本でこの特徴的流儀が用いられる年代的限度になっている。そこまで広まっていないのはAmsterdam(1591年-1744年)であり、たいへん少ないのはRotterdam(1650年、1655年)とThe Hague(1599年から1705年まで3例のみ)である。オランダで印刷された本でこのやり方が見られる他の例は以下のとおり。Haarlem(1599年)、Deventer(1652年)、Breda(1653年)、Utrecht(1663年-1721年)、Harlingen(1674年)、Delft(1683年)、Dordrecht(1698年)、Franeker(1700年)、Leeuwarden(1713年、1714年)。

オランダ以外でこの特徴的流儀が最もよく用いられるのはドイツである(Nuremberg 1594年-Leipzig 1797)。ほかの地域では少ない。**CIDIC**と記すやり方とは対照的に、イタリアで印刷された本では3例を数えるのみである(Naples 1722年、Rome 1772年、2点)。Genevaで印刷された本に2例(1644年、1651年)見つかっているが、フランスで印刷された本では1例のみである(Lyons 1595年)。Londonで印刷された本に4例(1590年、1611年、1658年、1730年)、北欧で印刷された本に3例(Copenhagen 1631年、1632年、Stockholm 1652年)見つかっている。

この特徴的流儀が使用されているか否かから導ける結論は、明らかに、決定的なものではない。フランスで印刷されたと標榜されている本で用いられていれば、どのやり方であっても、やや疑いの目を向けてよい。**CIDIC**というやり方が使われていればイタリアかドイツで印刷されたかもしれず、**cbb**というやり方が使われていればオランダ(とりわけLeiden)かドイツで印刷されたものかもしれない。

(iii) **∞.DC.LII**

このやり方が使われたのは3点だけである。Ghent (1617年), Antwerp (1618年), Hanau (1634)。前2者はベルギーだが、結論を導くのは難しい。

3. ローマ数字で出版年が表示されているが、後半が通常と違うやり方

これは種類が多いので、小論では数の多いものしか言及できない。**ciD**あるいは**cb**の後の**ID**がDになっていることがある (Venice 1589年, Rome 1648年, Breda 1653年)。もっと目を引くのは、DではなくCCCCとするやり方である (Paris 1518年)。さらには、DCではなくVICとするやり方もある。M.VIC (Amsterdam 1600年)とかM.VIC.V (Amsterdam 1605年)といった調子である。調査対象中印刷時期が最も早いものでは、刊行年の最後が大文字ではなく小文字のローマ字で記されているものがあつた。M.D.xx (Paris 1520年), M.D. et xxx (Antwerp 1530年), M.D.XXXiiij (Antwerp 1534年), Mil.D.xlv (Paris 1545年)。16世紀後期から17世紀前期に印刷された本では、引き算の原理 (IX, XL, XC) が通常の限度を超えて拡張されている。**ciD** **ciD** XXCIV (Venice 1584年), **cb**.**b**.XXCIIIX (Leiden 1588年), **ciD** DXXCIX (Venice 1589年), **ciD**.**iD**.IIC (Leiden 1598年), M.D.IIC (Frankfurt 1598年), **cbbc** LIIX (Duisburg 1658年)。1590年以降これらの事例の過半数がオランダまたはドイツで印刷された本だということは注意してよい。

この傾向は、通常の大文字がスモールキャピタルと混ぜて使われているとき、さらに強く出ており、主に17世紀に限られる。(i) **cbbc** **LII** Deventer (1652年), Amsterdam (1654年, 1684年, 1685年), Utrecht (1663年), The Hague (1682年), Dordrecht (1698年), Cologne (1683年), Paris (M.DC.**L** XIII, 1663年)。(ii) **cbbc** **LII** Wittenberg (1701年), Rome (1772年)。(iii) **cbbc** **LII** Cologne (1603年), Frankfurt (1625年), Danzig (1651年), Altenburg (1672年), Strasbourg (1676年), Nuremberg (1680年, 1683年), Hamburg (1687年), Leiden (1653年), Amsterdam (1669年), Copenhagen (1631年, 1632年), Stockholm (1652年)。したがって、このように混合して使われていれば、オランダ、ドイツないしもしかすれば北歐で印刷された本であると強く示唆される。

4. アラビア数字をつかうやり方

このやり方はどこでも使われているので、印刷地の特定にとっての有用性は限定的である。しかし、オランダ、スペイン、イングランドで印刷された本についてのみ言えば、確かに一般的である。オランダでは1575年から1776年までこのやり方が用いられている (いずれもLeidenで印刷された本)。アラビア数字の頻度が特に高かったのは、Amsterdam (1609年-1770年), Leiden (1575年-1776年), Franeker (1599年-1731年)である。The Hagueで印刷された本でも数少ない (3例, 1681年, 1700年, 1701年)。多くの事例はオランダ語の本である。フランス語およびラテン語の本では、ローマ数字をつかうやり方が一般に好まれている。18世紀に印刷された本では17世紀に印刷された本よりはるかに少ない。スペインで印刷された本では、1555年 (Saragossa) から1779年 (Seville) まで見られる。Londonで印刷された本ではアラビア数字をつかうやり方が1554年から1799年まで見られ、1700年までは支配的なやり方とみなして差し支えない。Oxfordで印刷された本 (1585年-1758年) でも頻度がたいへん高いが、Cambridgeで印刷された本 (1610年-1712年) およびEdinburghで印刷さ

れた本（1615年）ではそこまでではない。イングランドやオランダで印刷された本では18世紀にはかなり少なくなる。

他の地域ではこのやり方は明らかに少ない。イタリア（Parma 1552年-Sassari 1774年）とドイツ（Tübingen 1533年-Berlin 1762年）で印刷された本では一定程度見られるが、他のやり方のほうが多い。フランスで印刷された本でこのやり方がひろく用いられたのは、Lyons（1532年-1669年、および1771年に1例）、Douai（1629年）、および16世紀にParisで印刷された本である。1600年以降、このやり方がParisで印刷された本で用いられることはたいへん少ない（1602年から1647年までで7例、1761年に1例、1788年に2例を数えるのみである）。ベルギーでは、Antwerpで印刷された本（1528年-1694年）でかなり広く見られる。スイスでは、Basleで印刷された本（1547年-1641年）で時折見られる。Genevaで印刷された本に2例（1546年、1777年）が見つかるのみである。

調査対象の終盤である1780年以降に印刷された本では、このやり方の頻度がふたたび高くなる。これもまた、もっと日常的な現代的慣行を先取りするものと言える。それゆえ、このやり方が見つかったのは以下のとおりとなる。Paris（1788年、1791年、1792年、1797年、1798年）、Göttingen（1788年）、Berlin（1788年）、Bonn（1788年、1792年）、Breslau（1789年）、Vienna and Leipzig（1791年）、Prague（1797年）、Hamburg（1798年）、Neuchâtel（1783年、1787年）、Lausanne（1796年）、Basle（1797年）、Vicenza（1791年）、Naples（1796年）、Dublin（1792年）、London（1796年、1798年）、Stockholm（1783年、1786年）。

したがって、この特徴的流儀がなされているかどうかということは、主として消極的な価値をもつ。1600年から1780年までに印刷された本でアラビア数字が使われていれば、絶対確実とまではいえないが、フランスで印刷された本ではなさそうだという論拠になる。もっと積極的には、17世紀後半に印刷された本なら、オランダまたはイングランドで印刷されたと言えるかもしれない。

## 5. 綴りで記すやり方

Parisで印刷された本でMil cinq cens xlというように綴りで記すやり方があった。

## VI. 国別の要約

以下は国別に顕著な特徴を簡略化してまとめたものである。国内にバリエーションが大きいときには、印刷業が最も中心におこなわれていた地域ごとにまとめておいた。とりわけ年代的な留保が必要になったり、例外的事例についても本文中で紙幅を割いたりしたが、ここではほとんどは省略した。

### 1. フランス

#### (i) Paris

前付部分の折記号としてã ē ī ö ü（1730年以降はa b cまたはa b c）が使われ、折記号のアルファベット部分にSf, Vuという記し方が、数字部分にローマ数字が使われる（1780年-90年まで。以降はアラビア数字になる）（1755年まではiiijが用いられ、以降はivになる）。折記号が記される紙葉は、各折丁の半分までであるが、ただし4折判はあてはまらない（1770年まで、1葉目から3葉目まで記されている）。折丁キャッチワードが用いられる。標題紙の出版表示で、出版年がM.DC.LIIなどと記される。

(ii) Lyons

1680年頃までは、前付部分の折記号は多様であり、折記号の数字部分はアラビア数字であり、各折丁の折記号が記されている紙葉はParisと同様だが、ただし8折判は1葉目から5葉目まで、そして12折判では時折1葉目から7葉目まで、1葉目から5葉目まで記される点が異なる。ページ・キャッチワードおよび紙葉キャッチワード（1600年まで）、紙葉キャッチワード（1650年まで）が用いられ、標題紙の出版年表示はM.DC.LIIなどとなっており、しばしばイタリック体になっている。

1680年以降はParisで印刷された本と同様である。

(iii) Rouen

全体としてParisと同様だが、12折判で各折丁の1葉目から5葉目まで折記号が記される点が異なる（1597年-1616年）。

他のフランスの地方諸都市は、若干の異同はあるものの、通常Parisと同様である。顕著な例外はTournon, Toulouse, およびAvignonであり、Lyonsのパターンに近づいている。

2. ベルギー

(i) Antwerp

前付部分の折記号は★が用いられる。本文折記号のアルファベット部分にSfが使われ、数字部分はアラビア数字で記されている（1550年以降）。折記号が記されている紙葉は各折丁の半分のつぎの紙葉までである。ページ・キャッチワードが用いられ、標題紙の出版表示はM.DC.LII, ∞.DC.LIIなどとなっている。

Ghentで印刷された本はAntwerpのパターンに近い。

(ii) Brussels, Liège, Louvain

安定的なやり方は少なく、さまざまなやり方を混ぜた例が見られるので、ひとつのやり方にまとめるのは難しい。フランスとオランダの両方から影響を受けている。

3. スイス

(i) Geneva

前付部分の折記号は¶が用いられる。本文折記号のアルファベット部分には小文字が使用され（1665年まで）、数字部分にはローマ数字およびアラビア数字が、しばしば混ぜて使われる。各折丁への紙葉数の記し方はParisとおなじだが、8折判では異なる（1630年まで）。紙葉キャッチワードが用いられ（1658年まで）、標題紙の出版表示はM.DC.LIIなどとなっている。

LausanneとNeuchâtelは当然ながらGenevaと同様であるが、調査対象には18世紀後期の例が多いので、全体像はやや不鮮明である。

(ii) Basle

前付部分の折記号には $\alpha$   $\beta$   $\gamma$ , (), (i), )(, )(, )o(が用いられる。折記号に用いられるアルファベットは小文字（1584年まで）であり、Ss, Vuが使われる。折記号にはアラビア数字が使われる。折記号が記される紙葉は、各折丁の半分のつぎの紙葉までである（4折判および8折判）。ページ・キャッチワードが用いられ、標題紙の出版年はM.DC.LIIなどと記される。

Zurichで印刷された本はBasleと同様である。

#### 4. イタリア

前付部分の折記号には $\oplus$ ,  $\otimes$ , a b cが用いられ, 折記号のアルファベット部分にSf, Vu (1700年まで), Ss, Vv (1700年以降)が使われる。折記号の数字部分にはアラビア数字が用いられ, 折記号が記されている紙葉は各折丁の半分までである。ページ・キャッチワードが記され (1550年以降), ページづけは)I(などと記される。標題紙の出版年はMDCLII, **CIDCLII**と記される。

イタリアの慣行は非常に同質的で, 地域ごとの相違は概して有意性が小さい。

#### 5. オランダ

前付部分の折記号には $\star$  (しばしば連続として長々と使われる) や $\oplus$ が使われる。本文折記号のアルファベット部分でVvが使われ, 数字部分にはアラビア数字が使われる。折記号の記されている紙葉数は各折丁の半分のつぎの紙葉までである (ただし, 12折判では1葉目から6葉目まで記すやり方もよく見られる)。ページ・キャッチワード (しばしば一つのページに二つのキャッチワードが記される) と折丁キャッチワード (1750年以降) が使われる。ページづけはPag: 1などと記される。標題紙の出版年表示にはあらゆるやり方が使われるが, とりわけ**cbbclii**, 1652などという記し方がされる。

ここでも地域ごとのバリエーションには特筆すべきものは少ない。ただし主要な例外として, Leidenで印刷された12折判 (Elzevier工房で印刷された本) では, 各折丁の1葉目から5葉目までに折記号を記すという慣行が見られる。また, The Hagueで印刷された本では, 出版年表示をMDではじめるやり方が好まれている。

#### 6. ドイツ

ドイツで印刷された本は時期的な変動がつよく出ており, したがって要約には注意が必要である。地域ごとのバリエーションはそれほど大きくない。

前付部分の折記号では), )(, )o(, )?(, (:)が使われる。折記号のアルファベット部分でUが用いられ (1667年-1771年), Sf, Vu (1700年まで), Ss, Vv (1700年以降) が使われる。折記号の数字部分はアラビア数字が用いられる。折記号の記される紙葉は各折丁の半分のつぎの紙葉までである。ページ・キャッチワード, 紙葉キャッチワード (1691年まで), 折丁キャッチワード (1750年以降) が使われる。ページづけは~~o2~~(~~r~~)~~o~~などとされる。標題紙の出版年表示は, mdclii, **CIDCLII**, **cbbclii**などとなる。

#### 7. グレートブリテンおよびアイルランド

前付部分の折記号は, A a b, (a) (c), [a] [c]など。本文の折記号のアルファベット部分は, 最初の白紙葉にAが使われ, 本文はBではじまる。折記号にUが使われる (1650年以降)。Sf, Uu, 3Aも使われる。折記号の数字部分にはアラビア数字が使われる。折記号の記されている紙葉数は, 4折判では各折丁の1葉目から2葉目まで (1660年以降), 8折判では1葉目から4葉目まで, 12折判では1葉目から5葉目まで記される (1葉目から6葉目までの場合もある)。ページ・キャッチワードが用いられ, ページづけは)I, [I]などと記される。プレス・フィギュアが記される。標題紙の出版表示で出版年が, M,DC,LII, Mdclii, 1652などと記さ

れる。

Oxford, Cambridge, Dublinで印刷された本は、一般にLondonのやり方と同様である。  
スコットランドで印刷された本は、細かい点でやや異なる。

## 8. スペインおよびポルトガル

前付部分の折記号では『』が用いられ、折記号の数字部分にはアラビア数字が用いられる。折記号が記されている紙葉は各折丁の半分までで、ページ・キャッチワードが使われている。Pag: Iというページづけがされており、標題紙の出版表示において出版年が1652などと記されている。

## 9. 北欧

例は少なすぎるので、ひとつだけにまとめても本当に有益にならない。一般には、オランダの慣行と同様であるか、あるいはとりわけドイツの慣行と同様である。たとえば、) (, Uなど。

## VII. 結語

この調査にはさまざまな欠陥があることは十分に承知している。とりわけ、年代確定についての限界は指摘したとおりであり、再考が必要である。ではあるが、当然のこととして、ひとつの地域についてもっと詳細な調査をしていけば、小論の主要な結論が確認されるはずだと私は考えている。また、これらの慣行は個別の印刷工房のやり方の区別に役立つかという問題もある。小論ではEstiennes, Plantin-Moretus, LeidenのElzeviers, Foulises, Marc-Michel Reyの特徴をなすいくつかのやり方には言及したが、明らかにこの方面でさらに多くの調査が可能であろう。

また、小論で論じた特徴的流儀にはかなりの有意性をもつものもあるということは見えてきたとおりであるから、それについてもっと詳細で正確な情報を示せるよう、書誌記述の標準的な方法を修正すべきだということも示唆されるであろう。書誌記述法の基礎はほぼイングランドで印刷された本だけに集中しているため、結果として、大陸本の特徴的流儀のいくつかを顧みず、当然のことのように思っているイングランドのやり方がいかに特有のものであるかが覆い隠されてしまうという傾向になっている。

(翻訳ここまで)

## 二 Sayceの諸説の検討

### (1) ページづけと丁づけ

McKerrowが『書誌学入門』で述べているのは大略以下のようなことである。(1) 15世紀の最後の四半世紀まで丁づけは比較的少ない。丁づけされている場合、「folio」またはその省略形に続けて、ローマ数字が記されるやり方が多い。(2) 16世紀になると、ローマ数字ではなくアラビア数字が使われるようになる。(3) 1570年代から80年代頃、アラビア数字が単独で用いられるようになる。(4) 17世紀になる前後に大勢としてページ付けが丁づけにとって代わる。(5) ただし、どの時代であっても、丁づけとページづけがいずれも用いられている。

以下の表は、社会科学古典資料センター蔵書を対象にした調査において、ページづけあり、丁づけあり、いずれも無しの3種類に分けて、1650年の刊本まで、地域別、時代別に分布を

示したものである。

	フランス			スイス			ベルギー			イタリア		
	ページ	丁づけ	なし	ページ	丁づけ	なし	ページ	丁づけ	なし	ページ	丁づけ	なし
1501-1550	0	4 (80%)	1 (20%)	3 (75%)	1- (25%)	0	-	-	-	1 (7%)	13 (87%)	1 (7%)
1551-1600	35 (65%)	14 (26%)	5 (9%)	11 (65%)	5 (29%)	1 (6%)	11 (65%)	5 (29%)	1 (6%)	34 (53%)	23 (36%)	7 (11%)
1601-1650	53 100%	0	0	6 (75%)	0	2 (25%)	12 (19%)	1 (2%)	51 (80%)	37 (88%)	3 (7%)	2 (5%)
	オランダ			ドイツ・オーストリア			イギリス					
	ページ	丁づけ	なし	ページ	丁づけ	なし	ページ	丁づけ	なし			
1501-1550	-	-		2 (25%)	2 (25%)	4 (50%)	0	1 100%	0			
1551-1600	7 (88%)	1 (13%)	0	23 (64%)	11 (31%)	2 (6%)	4 (44%)	5 (56%)	0			
1601-1650	97 (96%)	2 (2%)	2 (2%)	122 (92%)	0	10 (8%)	86 (91%)	3 (3%)	5 (5%)			

限られた点数の調査ではあるが、丁づけが時代を下がるにつれてページづけにとって代わられることは明白である。最もよく丁づけが用いられていたイタリアで印刷ないし出版された本でさえ、17世紀に入るとあまり見られなくなる。なお、17世紀前半のベルギーで、番号づけをしないやり方が相当程度を占めるが、ここでは指摘するにとどめる。

## (2) ページづけの仕方

以下は、上記の表のうちページづけがされている資料に限って、丸括弧、角括弧等ページづけの仕方の分布を地域別に示したものである。ページづけがアラビア数字で行われているかローマ数字で行われているかは区別していない。Sayceは)1(のように向きが反転しているものや、)1(のように二重に囲まれているものを丸括弧で一括しているが、ここでは分けた。また、Sayceは挙げていないが、ページ番号を棒状の長い線で囲むやり方(— 1 —)が一定程度見られたので、項目に加えた。

丁づけになっている資料では、数字だけのこともあるが、Folio I., FO.I., Fol. I., Das I Blat.などの表示が奇数ページに現れていることが多い。これらはPage:1の標目に一括している。

### フランスで印刷ないし出版された資料

	1	(1)	[1]	装飾	)1(	— 1 —	Page:1	その他
1501-1600	50 (94%)	1 (2%)	0	0	0	0	2 (4%)	0
1601-1650	52 (98%)	0	0	1 (2%)	0	0	0	0
1651-1700	120 (98%)	2 (2%)	0	0	0	1 (1%)	0	0
1701-1750	161 (99%)	2 (1%)	0	0	0	0	0	0
1751-1800	733 (75%)	232 (24%)	12 (1%)	2 (0%)	0	0	0	4 (0%)
合計点数	1,116 (81%)	237 (17%)	12 (1%)	3 (0%)	0	1 (0%)	2 (0%)	4 (0%)

調査結果からは、フランスで印刷された本のページづけは、特に括弧で囲まず数字だけを記すことが多いことがわかる。しかし、18世紀後半になると丸括弧で囲むやり方が増え、角括弧も見られるようになる。

ベルギーで印刷ないし出版された資料

	1	(1)	[1]	装飾	)1(	— 1 —	Page:1	その他
1501-1600	16 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1601-1650	14 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1651-1700	8 (89%)	0	0	0	0	0	0	1 (11%)
1701-1750	3 (43%)	4 (57%)	0	0	0	0	0	0
1751-1800	28 (85%)	5 (15%)	0	0	0	0	0	0
合計点数	69 (87%)	9 (11%)	0	0	0	0	0	1 (1%)

スイスで印刷ないし出版された資料

	1	(1)	[1]	装飾	)1(	— 1 —	Page:1	その他
1501-1600	19 (95%)	0	0	0	0	0	1 (5%)	0
1601-1650	6 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1651-1700	5 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1701-1750	14 (78%)	2 (11%)	0	2 (11%)	0	0	0	0
1751-1800	139 (88%)	15 (9%)	1 (1%)	1 (1%)	0	0	0	2 (1%)
合計点数	183 (88%)	17 (8%)	1 (0%)	3 (1%)	0	0	1	2 (1%)

スイスで印刷された本は、フランスで印刷された本に類似した傾向があるが、18世紀になると地域によってはオーナメントの使用など、ドイツの影響も見られる。

イタリアで印刷ないし出版された資料

	1	(1)	[1]	装飾	)1(	— 1 —	Page:1	その他
1501-1600	71 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1601-1650	40 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1651-1700	42 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1701-1750	30 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1751-1800	79 (88%)	5 (6%)	0	3 (3%)	2 (2%)	0	0	1 (1%)
合計点数	264 (96%)	5 (2%)	0	3 (1%)	2 (1%)	0	0	1 (1%)

イタリアで印刷された本も同様であるが、18世紀後半になると、二重に丸括弧を使うやり方)(1)(も見られるようになる。

オランダで印刷ないし出版された資料

	1	(1)	[1]	装飾	)1)(	— 1 —	Page:1	その他
1501-1600	8 (100%)	0	0 (%)	0	0	0	0	0
1601-1650	99 (99%)	0	0	0	0	0	1 (1%)	0
1651-1700	63 (90%)	1 (1%)	0 (%)	0	0	0	0	6 (9%)
1701-1750	118 (98%)	2 (2%)	0	0	0	0	0	1 (1%)
1751-1800	234 (83%)	35 (12%)	12 (4%)	0	0	0	0	2 (1%)
合計点数	522 (90%)	38 (7%)	12 (2%)	0	0	0	1	9 (2%)

オランダで印刷された本では数字だけを表示するページづけが一般的であるが、18世紀になる頃から丸括弧に囲むやり方が、18世紀後半には角括弧で囲むやり方が見られるようになる。

ドイツおよびオーストリアで印刷ないし出版された資料

	1	(1)	[1]	装飾	)1)(	— 1 —	Page:1	その他
1501-1600	37 (93%)	0	0	0	0	0	3 (8%)	0
1601-1650	122 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1651-1700	113 (76%)	3 (2%)	0	6 (4%)	0	0	0	27 (18%)
1701-1750	290 (84%)	3 (1%)	0	30 (9%)	2 (1%)	0	0	21 (6%)
1751-1800	1,022 (91%)	31 (3%)	3 (0%)	12 (1%)	3 (0%)	44 (4%)	0	9 (1%)
合計点数	1,584 (89%)	37 (2%)	3 (0%)	48 (3%)	5 (0%)	44 (2%)	0	57 (3%)

数字をオーナメントで囲むやり方はドイツで印刷された本のページづけに一定程度見られた。センターで調査した資料では、丸括弧を二重に用いるやり方)(1)(や反転させるやり方)I(も見られ、18世紀後半になると棒状の長い線を用いるやり方— 1 —も見られた。オーナメントの簡略化と言えるかもしれない。

イギリスで印刷ないし出版された資料

	1	(1)	[1]	装飾	)1)(	— 1 —	Page:1	その他
1501-1600	9 (100%)	0	0	0	0	0	0	0
1601-1650	57 (64%)	32 (36%)	0	0	0	0	0	0
1651-1700	170 (62%)	84 (31%)	19 (7%)	0	0	0	0	1 (0%)
1701-1750	191 (40%)	167 (35%)	111 (24%)	0	0	0	0	3 (1%)

1751-1800	649 (59%)	224 (20%)	227 (20%)	1 (0%)	0	0	0	7 (1%)
合計点数	1,076 (55%)	507 (26%)	357 (18%)	1 (0%)	0	0	0	11 (1%)

イギリスで印刷された資料でも数字だけを表示するやり方が最も多いが、17世紀前半以降丸括弧で囲むやり方(1)が他の地域よりも多く見られた。また、17世紀後半以降角括弧で囲むやり方[1]も相当数見られた。他の地域では、角括弧で囲むやり方は18世紀後半まで見られなかった。逆に言うと、18世紀後半になるとページづけのやり方に関するそれまでの印刷慣行が崩れ、共通化が進行していくようである。

### (3) プレス・フィギュア

紙葉のうら面またはおもて面の、本文や註が印字されているより下に、脈絡なく1桁の数字だけがぼつんと打ってあることがある。折記号ともキャッチワードとも違うこの数字を——あるいは他の記号であることもあるが——、プレス・フィギュアと呼ぶ。Gaskellによれば、「17世紀後期から18世紀末まで、イギリスの印刷工が、自分の印刷しようとしている版のページ下部に、アラビア数字ないし他の記号を配置することがあった」<sup>7</sup>。プレス・フィギュアを記す目的は、ひとつには歩合制で働く印刷工が自分の作業分を証明するためであり、もうひとつには低劣な印刷が見受けられた場合に誰の仕業かわかるようにしておくためだったとされている。

以下の表は、センター所蔵資料をもとにした調査において、プレス・フィギュアの使用の有無の分布を、地域別、時代別に示したものである。

	フランス	ベルギー	スイス	イタリア	オランダ	ドイツ・オーストリア	イギリス
1501-1600	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
1601-1650	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
1651-1700	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	7 (3%)
1701-1750	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (3%)	0 (1%)	0 (0%)	141 (29%)
1751-1800	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	463 (41%)
合計点数	0 (1,392点中)	0 (135点中)	0 (213点中)	0 (283点中)	0 (585点中)	0 (1,827点中)	611 (1,975点中)

上記のように、17世紀後半以降のイギリス以外でプレス・フィギュアは使用されない。

つぎに、イギリスとして一括したものを、イングランド、スコットランド、アイルランドに分け、さらにアメリカ合衆国で印刷ないし出版された本についての数値を加えたものが次表である。

<sup>7</sup> Philip Gaskell, *A New Introduction to Bibliography*, Oxford University Press, 1972, p. 133.

	英米圏全体	イングランド	スコットランド	アイルランド	アメリカ合衆国
1501-1600	0 (0%)	0 (0%)	-	-	-
1601-1650	0 (0%)	0 (0%)	-	-	-
1651-1700	7 (3%)	6 (2%)	1 (33%)	1 (0%)	-
1701-1750	141 (29%)	137 (31%)	1 (6%)	3 (21%)	0 (0%)
1751-1800	470 (40%)	446 (45%)	3 (6%)	14 (19%)	7 (10%)
合計点数	618 (2,051 点中)	589 (1,819 点中)	5 (71 点中)	17 (88 点中)	7 (73 点中)

見られるように、センターにおける調査からも、プレス・フィギュアの使用がとりわけ18世紀にイングランドで印刷された本の顕著な特徴であると言える。センター所蔵資料でスコットランド、アイルランド、アメリカ合衆国で印刷された資料を十分な数調査できたわけではないし、出版地しか判明しない資料もここには含まれているから、確実な指標とは言えないが、イングランドほど頻繁に利用されていないとは言えそうである。

#### (4) 標題紙の出版年表示

以下では、Sayceにならって、センター所蔵資料について調査した結果にもとづき、標題紙に出版年を表示する様々なやり方の分布を地域別、時代別に見ていく。なお、今回の調査では、**CIDDCLII**と**cbbcLII**は区別せずに一括した。ピリオドによる区切り方についても、M.D.CLIIなどというやり方が最も一般的だが、最初にしか打たないやり方M.DCLIIや3つ重ねるやり方M.D.C.LII、後ろを空白で区切るやり方M.D C LII、また17世紀になるとM.D.C.C.LIIなどといちいちピリオドを打つやり方など多くの変種があり、細かな分析が可能なかもしれないが、ここでは区別しなかった。また、ローマ数字の1,000をMではなく∞と表示するやり方および綴りで示すやり方はわずしか見つからなかったため、「その他」に含め、文中で説明することにする。

#### フランスで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計点数
	MD,CLII	M,D,CLII	M D CLII	MDCLII	Mdclii	イタリック	CIDDCLII				
1501-1600	29 (49%)	0	1 (2%)	1 (2%)	0	2 (3%)	1 (2%)	24 (41%)	-	0	58
1601-1650	37 (73%)	0	0	1 (2%)	0	2 (4%)	2 (4%)	9 (17%)	-	0	51
1651-1700	99 (80%)	0	2 (2%)	1 (1%)	0	6 (5%)	0	16 (13%)	-	0	124
1701-1750	137 (84%)	0	3 (2%)	11 (7%)	0	3 (2%)	0	10 (6%)	-	0	164

1751-1800	487 (50%)	0	3 (0%)	9 (1%)	0	9 (1%)	0	277 (28%)	193 (20%)	0	978
合計点数	789 (57%)	0	9 (1%)	23 (2%)	0	22 (2%)	3 (0%)	336 (24%)	193 (14%)	0	1,375

調査結果から、フランスで印刷された資料では、M.D.CLIIなどというようにローマ数字をピリオドで区切りながら表示するやり方が一般的であることがわかる。特に17世紀から18世紀前半にかなり多い。しかし、アラビア数字も古くから使われており、18世紀後半から再び増えている。

なお、1772年にPoitiersで印刷された本で、出版年がM.DCC.LXXIIとなっているものがあったが、ピリオド区切りに含めた。

18世紀後半の例で「その他」に分類したのは、1758年～1760年に出版されたMirabeauの8冊のL'Ami des hommesで、綴り（mil sept cent cinquante huit等）で記されている。

また、通常出版年が表示されている箇所にアラビア数字で5871と記されている本があったが、これはLes vieilles lanternes, conte nouveauという奇妙な題名や、印刷地・印刷者が秘匿されA Pneumatopolis, Chez Lucrain, & se trouve chez tous les débitants des vérités à la modeなどと記されている点から考えて、意図的に誤記したものと思われる。Emil Weller, Die falschen und fingierten Druckorte, 2. Bd., 1970に従って、印刷地はParis, 印刷年は1785年とみなし、アラビア数字表記に数えた。むしろ出版年とはアラビア数字で表記すべきものとみなされた例とも言える。

なお、この表では、自由暦（L'An de la liberté）やAnacharsis Clootsのl'an de la Rédemption等、革命暦施行に先行して類似の暦を名乗った例も革命暦に含めている<sup>8</sup>。ちなみに、フランス国内で革命暦（共和暦）が採用されたのは1793年途中であるので、翌年1794年から1800年までに印刷された資料に限って分布を調べてみると、以下の表のようになる。

フランスで1794年－1800年に印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計点数
	MDCLII	M.D.CLII	M D CLII	MDCLII	Mdclii	イタリック	CIIDCLII				
1794-1800	6 (3%)	0	0	0	0	0	0	23 (11%)	176 (85%)	0	207

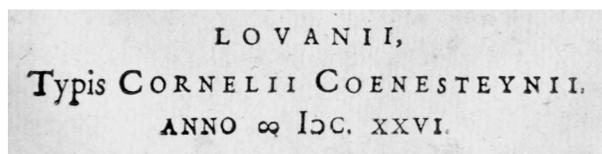
革命暦はL'An（ローマ数字）de la Républiqueなどと記されていることが多いが、稀にアラビア数字が用いられていることもある。単にL'An（ローマ数字）とだけ記されているときもある。また、西暦と併記されることもあり、その場合西暦はアラビア数字で表記されている。

<sup>8</sup> 本年報第33号に掲載した拙文「共和暦をめぐる」を参照。

ベルギーで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計 点数
	M.D.C.LII	M.D.C.LII	M D C LII	MDCLII	Mdclii	イ タ リ ッ ク	∞ ∞ ∞ ∞ ∞				
1501-1600	17 (81%)	0	0	0	0	0	0	4 (19%)	-	0	21
1601-1650	17 (26%)	0	0	0	0	0	3 (5%)	41 (63%)	-	4 (6%)	65
1651-1700	3 (33%)	0	0	0	0	0	0	6 (67%)	-	0	9
1701-1750	1 (14%)	0	0	1 (14%)	0	0	0	5 (71%)	-	0	7
1751-1800	27 (82%)	0	0	1 (3%)	0	0	0	4 (12%)	1 (3%)	0	33
合計点数	65 (48%)	0	0	2 (1%)	0	0	3 (2%)	60 (44%)	1 (1%)	2 (1%)	135

ベルギーのピリオドで区切られた例には、16世紀について、Antwerpで1585年に印刷されM.V.LXXXV.と記された1点、17世紀前半について、Ghentで1623年および1624年に印刷ないし出版された3点で、それぞれMDC.XXIII, M.D.C.XXIII, M.D.C.XXIVと記されたものを含む。革命暦に数えあげた1点は、BruxellesのHuygheから発行されたもので、Vendémiaire, an IVの日付があり、共和暦3年のフランス共和国憲法である。また、17世紀前半の「その他」のうち2点は、1606年と1607年にGhentで印刷された本で、いずれも綴りで記された例(anno M. zeshondert en zesseおよびAnno M. zeshondert en zeuen)である。もう2点は、∞が用いられた例であり、ひとつは1626年にLouvainで、もうひとつは1634年にAntwerpで印刷されている。下はLouvain本の表示である。



スイスで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計 点数
	M.D.C.LII	M.D.C.LII	M D C LII	MDCLII	Mdclii	イ タ リ ッ ク	∞ ∞ ∞ ∞ ∞				
1501-1600	11 (52%)	0	3 (14%)	0	0	0	1 (5%)	2 (10%)	-	4 (19%)	21
1601-1650	4 (50%)	0	0	0	0	3 (38%)	1 (13%)	0	-	0	8
1651-1700	2 (25%)	0	0	0	0	6 (75%)	0	0	-	0	8

1701-1750	4 (22%)	0	1 (6%)	6 (33%)	0	0	0	7 (39%)	-	0	18
1751-1800	63 (40%)	0	1 (1%)	38 (24%)	0	0	1 (1%)	54 (34%)	1 (1%)	0	158
合計点数	84 (39%)	0	5 (2%)	44 (21%)	0	9 (4%)	3 (1%)	63 (30%)	1 (0%)	4 (2%)	213

16世紀の「その他」4点は、Baselで印刷された4巻本で、M▶D▶などと記されたものである。

#### イタリアで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計点数
	M.D.C.LII	M.D.C.LII	M D C LII	MDCLII	Mdclii	イタリック	II7DCLII				
1501-1600	29 (38%)	0	28 (36%)	2 (3%)	0	7 (9%)	0	11 (14%)	-	0	77
1601-1650	11 (26%)	0	16 (38%)	6 (14%)	0	4 (10%)	0	5 (12%)	-	0	42
1651-1700	26 (62%)	0	1 (2%)	8 (19%)	0	2 (5%)	0	5 (12%)	-	0	42
1701-1750	4 (13%)	0	5 (17%)	19 (63%)	0	1 (3%)	0	1 (3%)	-	0	30
1751-1800	6 (7%)	0	3 (3%)	60 (67%)	0	3 (3%)	2 (2%)	14 (16%)	1 (1%)	0	89
合計点数	76 (27%)	0	53 (19%)	95 (34%)	0	17 (6%)	2 (1%)	36 (13%)	1 (0%)	0	280

イタリアで16世紀に印刷された本では、ローマ数字をピリオドで区切るやり方と空白で区切るやり方が拮抗しているが、17世紀後半からピリオドで区切るやり方に傾斜する。しかし、18世紀になると、間隔を詰めて記すやり方が増大する。また、イタリック体にするやり方が一貫してある程度見られる。

なお、ピリオドで区切った例は、16世紀について、1548年にVeniceで印刷されM D.XLVIIIと記された例（空白とピリオド区切りが併用されたか、不注意から混用された例）、および、17世紀前半について、1638年にFlorenceで印刷されM.DC.xxxviiijと記された例を含む。革命暦の例に数えあげたものは、おそらく1797年にMilanで印刷されたもので、l'anno I. della Repubb. Cifalpinaと表示されている。フランスの衛星国であったチザルピーナ共和国を指す。

#### オランダで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計点数
	M.D.C.LII	M.D.C.LII	M D C LII	MDCLII	Mdclii	イタリック	II7DCLII				
1501-1600	4 (50%)	0	0	0	0	0	2 (25%)	2 (25%)	-	0	8
1601-1650	5 (5%)	0	8 (8%)	1 (1%)	0	2 (2%)	52 (51%)	34 (33%)	-	0	102

1651-1700	15 (21%)	0	6 (8%)	4 (6%)	0	6 (8%)	17 (24%)	24 (33%)	-	0	72
1701-1750	69 (57%)	0	9 (7%)	27 (22%)	0	4 (3%)	3 (2%)	8 (7%)	-	1 (1%)	121
1751-1800	150 (53%)	0	8 (3%)	44 (16%)	0	19 (7%)	0	61 (22%)	-	0	282
合計点数	243 (42%)	0	31 (5%)	76 (13%)	0	31 (5%)	74 (13%)	129 (22%)	-	1 (0%)	585

オランダで16世紀および17世紀に印刷された資料では、**CIDCLII**などという記載法が広く用いられる。しかし、アラビア数字も古くから用いられている。18世紀になって**CIDCLII**という表記が使われなくなると、ローマ数字をピリオドで区切るやり方に移行する。

なお、18世紀前半の「その他」の例は、Laurent Angliviel La Beaumelleが1749年頃に匿名で刊行した*L'asiatique tolérant*という題名の本である。出版地として記されているのはParisだが、実際にはAmsterdamのM. M. Reyによって印刷されたことがすでに判明している。この本では、通常出版年が記されている場所にL'An XXIV. du traducteurと記されている。寛容論に対する弾圧を避けるため、著者名と印刷地ばかりか、出版年も秘匿したのである。

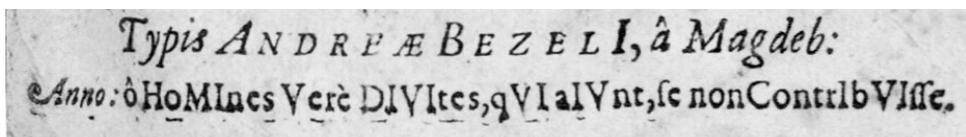
ドイツおよびオーストリアで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計点数
	M.DCCLII	M.DCCLII	M D CLII	MDCCLII	Mdclii	イタリック	<b>CIDCLII</b>				
1501-1600	22 (54%)	0	4 (10%)	0	0	3 (7%)	4 (10%)	8 (20%)	-	0	41
1601-1650	52 (40%)	2 (2%)	10 (8%)	4 (3%)	0	26 (22%)	12 (9%)	22 (17%)	-	1 (1%)	133
1651-1700	39 (23%)	0	23 (14%)	5 (3%)	0	14 (8%)	38 (23%)	47 (28%)	-	0	166
1701-1750	8 (2%)	0	73 (21%)	63 (18%)	0	12 (3%)	30 (9%)	166 (47%)	-	0	352
1751-1800	29 (3%)	0	11 (1%)	56 (5%)	0	5 (0%)	12 (1%)	1,017 (90%)	-	0	1,130
合計点数	151 (8%)	2 (0%)	121 (7%)	128 (7%)	0	63 (3%)	96 (5%)	1,260 (69%)	-	1 (0%)	1,822

ドイツやオーストリアで印刷された本では、17世紀までMDを使うローマ数字、**CIDCLII**を使うローマ数字、アラビア数字がいずれも用いられていたが、18世紀になると徐々にアラビア数字一辺倒になっていく。

なお、16世紀のピリオド区切りの本は、Leipzigで1533年に印刷されM.D.XXXijと記された例1点を含む。17世紀前半のピリオド区切りには、Hannoverで1620年に印刷された本でピリオドの位置が通常と違ってMDC.XXとなっていたものを含む。

17世紀前半の「その他」に数えたのは、1632年にMagdeburgで印刷された本で、いわゆるクロノグラム（文中に含まれるローマ数字で年代を表す文字謎の一種）で記された例である。Anno : ô HoMInes Verè DIVItes, qVI aIVnt, fe non ContrIbVIIfe（貢納せずして真に裕福ならず）というラテン語文に隠されているローマ数字MIVDIVIVIIVCIVIを合算すると、1000+1+5+500+1+5+1+5+1+1+5+100+1+5+1=1632となる。



イギリスで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計 点数
	M.D.CCLII	M.D.CCLII	M D CCLII	MDCLII	Mdclii	イタリック	II7DCLII				
1501-1600	0	0	0	0	0	0	0	10 (100%)	-	0	10
1601-1650	0	0	1 (1%)	3 (3%)	0	1 (1%)	1 (1%)	88 (94%)	-	0	94
1651-1700	12 (4%)	0	23 (8%)	27 (10%)	0	0	1 (0%)	215 (77%)	-	0	278
1701-1750	71 (15%)	7 (1%)	64 (14%)	101 (21%)	14 (3%)	1	0	215 (45%)	-	0	473
1751-1800	252 (23%)	63 (6%)	185 (17%)	298 (27%)	6 (1%)	11 (1%)	1 (0%)	298 (27%)	-	0	1,114
合計点数	335 (17%)	70 (4%)	273 (14%)	429 (22%)	20 (1%)	13 (1%)	3 (0%)	826 (42%)	-	0	1,969

イギリスでは当初からアラビア数字が広く用いられ、むしろ18世紀からローマ数字も見られるようになる。ローマ数字は区切らず用いられることが比較的多いが、Sayceも指摘しているように、18世紀途中からローマ数字をコンマで区切るやり方が出てくる。また、18世紀からMdcliiなどというようにスモールキャピタルを使うやり方も出てきている。

Sayceによれば、16・17世紀にFrankfurt, Lyons, Genevaで印刷された本では、出版年表示の際にイタリック体を使用するという特徴がある。それぞれの都市で印刷ないし出版された資料だけをまとめれば、以下の表のとおりになる。十分な点数を調査できたわけではないにせよ、もちろんイタリック体一辺倒ではないが、上記の国別の表と比較して、全体としてイタリック体が多いことがわかる。

Frankfurtで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計 点数
	M.D.CCLII	M.D.CCLII	M D CCLII	MDCLII	Mdclii	イタリック	II7DCLII				
1501-1600	7 (70%)	0	1 (10%)	0	0	1 (10%)	0	1 (10%)	-	0	10
1601-1650	13 (41%)	0	4 (13%)	0	0	7 (22%)	4 (13%)	4 (13%)	-	0	32
1651-1700	5 (19%)	0	9 (33%)	3 (11%)	0	3 (11%)	0	7 (26%)	-	0	27

1701-1750	0	0	9 (35%)	4 (15%)	0	2 (8%)	2 (8%)	9 (35%)	-	0	26
1751-1800	0	0	1 (2%)	2 (3%)	0	1 (2%)	0	57 (92%)	-	0	62
合計点数	25 (16%)	0	24 (15%)	9 (6%)	0	14 (9%)	6 (4%)	78 (50%)	-	0	157

Lyonで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計点数
	M.D.C.LII	M.D.C.LII	M D C LII	MDCLII	Mdcilii	イタリック	CIIDCII				
1501-1600	8 (67%)	0	0	0	0	1 (8%)	0	3 (25%)	-	0	12
1601-1650	4 (67%)	0	0	1 (17%)	0	1 (17%)	0	0	-	0	6
1651-1700	12 (71%)	0	0	0	0	5 (29%)	0	0	-	0	17
1701-1750	3	0	0	1 (20%)	0	1 (20%)	0	0	-	0	5
1751-1800	9 (75%)	0	0	0	0	1 (8%)	0	1 (8%)	1 (8%)	0	12
合計点数	36 (69%)	0	0	2 (4%)	0	9 (17%)	0	4 (8%)	1 (2%)	0	52

Genevaで印刷ないし出版された資料

	ローマ数字							アラビア数字	革命暦	その他	合計点数
	M.D.C.LII	M.D.C.LII	M D C LII	MDCLII	Mdcilii	イタリック	CIIDCII				
1501-1600	2 100%	0	0	0	0	0	0	0	-	0	2
1601-1650	4 (80%)	0	0	0	0	1 (20%)	0	0	-	0	5
1651-1700	1 (25%)	0	0	0	0	3 (75%)	0	0	-	0	4
1701-1750	4 (67%)	0	0	1 (17%)	0	0	0	1 (17%)	-	0	6
1751-1800	30 (73%)	0	0	4	0	0	0	7 (17%)	-	0	41
合計点数	41 (71%)	0	0	5 (9%)	0	4 (7%)	0	4 (14%)	-	0	58

(一橋大学社会科学古典資料センター専門助手)